

クラリスルート

鈴木ひまり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの時その時の選択の違いから分岐した世界線はおそらく無数にある。
これはその一つ。

※『乙女ゲー世界はモブたちに厳しい世界です』より移行しました。

旧連載分はこちら↓ <https://syosetu.org/novel/21>

目次

連休	1
ターニングポイント	19
選択	40

連休

灰色の空にうつすらと太陽が光っている。

辺りは静かで風の音以外は何も——鳥の声も、虫の歌も、木の葉擦れの音も、何も聞こえない。

風は冷たく、吐く息は白い。

ふと、頬に冷たい感触。

いつの間にか風が雪が混じっていた。

寒さに身体がぶるりと震える。

もうずっと、寒い日が続いている。

かつてのような抜けるような青空は見る影もなく、ずっとどんよりと濁った灰色の空。

時々薄い雲がかかって、こうして雪を降らせる。

——こんな世界になってしまったのは俺のせいだ。

俺が自分の周りのほんの一握りの大切な人たちの命と——その人たちと一緒にいたという自分の願いと引き換えに、世界の命運を放り出したから。

もはや何をしてもこの罪を贖うには到底足りない。そもそも贖罪の機会すらない。

今の俺にできることはその罪と引き換えに得たものを絶対に手放さないよう、失わな
いよう、繋いでいくことだけだ。

それでも——今のように時々思うのだ。

俺はどこで間違ったのか。

もつと、別の——ハッピーとは行かずとも、ベターな結末があつたのではないかと。

そしてその度、浮かんでくる言葉がある。

この世で最も愛しくて、大切に、共に幸福な未来を歩めるだろうと、漠然とそう思っ
ていた人が発した言葉。

「貴方は捻くれているけど優しいのね」



学園祭最終日。

その時の俺は保身のためにクラリス先輩の元婚約者「ジルク・フィア・マーモリア」——事もあろうにマリエという転生者の女に夢中になって、クラリス先輩との婚約を手紙ひとつで一方的になかったことにしやがった挙句、彼女の恨みを買ってエアバイクレースでボコボコにされた男——の代理人としてエアバイクレースに出るといふ損な役回りを演じていた。

そしてレースで——それと喫茶店を馬鹿共に荒らされたのと、「カーラ・フォウ・ウエイン」がリビアを通して俺に空賊討伐を依頼してきたのも付け加えておく——散々な目に遭つて得たものは賭けで儲けた家が建ちそうな大金——という虚しさしかない有様。

無能な働きの者が勝手な判断で余計なことに首を突っ込んでしつぺ返しを受けたと言え、ばそれまでだが、俺はその当時まだ男爵。しかも王太子ユリウス殿下を決闘でボコボコにした挙句、説教まで垂れるという、下手しなくても極刑モノの暴挙をやらかした後で、アンジェの実家が後ろ盾になってくれなければ命が危うい状況だった。

ジルクの代役が用意できなければ学年の代表たるアンジェの評価が下がる、という話を聞いて、「俺が出なければアンジェパパを怒らせてしまう、そうなったら俺が死ぬ」と考えた当時の俺を誹る気にはなれない。

ルクシオンはそんな俺をモブとは程遠い「立派な取り巻き」と揶揄していたけど。

——まあそんなこんなで学園祭が終わった後の俺はブルーな気分だった。

おまけに俺がエアバイクレースで酷い目に遭っている間にリビアとアンジェの関係に亀裂が入ってしまったって、そっちの対処もしなければならなかった。



校舎裏の隅に隠れるようにしてリビアは座り込んでいた。

声をかけると、彼女は顔を上げた。

ずっと泣いていたらしく、目の周りが若干腫れていた。

痛々しい笑顔で「どうしたら良いのか分からなくなりました」と言う彼女の隣に座り、話を聞いた。

俺がエアバイクレースに出ている最中にあの腹立たしいオフリー伯爵令嬢——亜人奴隷を引き連れて俺の喫茶店を荒らしてくれた挙句、王妃であるミレーヌ様を「おぼさん」だの「婆」だのと呼びやがった糞ビ●チ——がアンジェに喧嘩を売り、おまけに止めに入ったリビアに「平民風情が会話に割り込むな」などという言葉をぶつけ、「アンジェが取り巻きに裏切られたことで平民であるリビアにすり寄った」などと吹聴しやがったんだとか。

そしてアンジェはそれに反論できなかつたらしい。

まあ、無理もない。公爵令嬢ともなれば俺の実家のように普段から平民と接する機会なんてないだろうし。

以前のアンジェが平民のことなど気にも留めていなかったと言われても俺は驚かない。

というか、いつかそれが原因で破局するんじゃないかとも思っていた。

でもリビアは——そうじゃない。

俺はリビアに何と言葉をかけるべきか少し悩んだ。

今の彼女が求めているのは根拠のない慰めではない。自分たちは上手くいっていた、アンジェは自分をちゃんと友達だと思ってくれていた、という確証だ。

でも、俺が言葉を並べたところで納得させられるかは怪しいところだ。

俺は煽ることは長けていても、相手の心に届く言葉など心得がない。

一応、伝えるのではなく気付かせる、というやり方もあるが、失敗すれば余計にリビアを傷つけてしまう。

やはり——時間という薬に頼った方が良いのではないだろうか。

少し、リビアが傷ついた心を休めて、冷静になる時間を作ってあげれば——

「リビア——しばらく休まないか？」

俺はしばし迷った末に、そう言った。

「え？休むって——学園祭が終わったら連休ですよね？」

リビアが至極真つ当な返答をしてくる。

「休むってというのは——少し、学園を離れるって意味だよ。リビアにはしばらく学園を離れて、心を休める時間が必要。俺にはそう思えるけどな」

さつきリビアはアンジェともう一度話をしてみると言っていたが、そのアンジェはさつき俺が会いに行った時には学園を出る支度をしているところだった。

糞——じゃなかった、オフリー嬢と派手な取っ組み合いを演じたことで実家に呼び出されたらしい。

時間的に考えてもう出発してしまっている。多分連休が終わるまで帰ってこないだろう。

一方でオフリー嬢はルクシオンに調べさせたところ学園にいる。

となると、オフリー嬢がアンジェのいない隙を突いてリビアに嫌がらせを行う可能性がある。

俺への嫌がらせに失敗したらそれを逆恨みしてアンジェにぶつけるような奴だ。次

はリビアを狙うことは十分あり得る。

となると——リビアの安全のためには彼女にしばらく学園を離れてもらうしかない。アンジェがいらない以上、俺がついていても限度がある。

俺は男子で女子寮には入れないのだから。

「リビア、今回の件で分かっただろ？今まではアンジェのおかげでそこまで酷くはならなかったけど、この学園にはリビアに対して悪意を持つ奴が大勢いる。リビアの身の安全を守るためにも、アンジェがいらない連休中は学園を離れていた方がいい」

俺はリビアを説得する。

リビアは気圧されたのか、反論してこなかったが、終始困ったような、納得がいかないうような、複雑な表情を浮かべていた。

そして彼女は口を開くが、すぐに言葉は途切れてしまう。

「でも——私は——」

逃げたくありません、とでも言おうとしたのだろうか？

でも結局リビアはその先を口にしなかった。

代わりにちよつと悲しげな笑顔で同意の言葉を口にした。

「いえ、やつぱり、そうですね。リオンさんが言うなら、そうした方がいいですよね」

リビアはその日のうちに簡単に荷物をまとめて故郷に帰っていった。

「帰省だと思えばいいよ。夏休みだって帰ってなかっただろ？」

俺はそう言って港までリビアを送って行き、定期船の切符を買ってあげた。

リビアは連休中図書館で勉強するつもりだったらしいが、少々強引に押し切らせてもらった。

帰って来る日には港に迎えに行く約束して俺はリビアと別れた。

さてと——空賊討伐依頼の方を片付けないとな。

本来ならカーラが空賊退治を依頼してくるのは中盤——学園二年生時——のイベントなのだが、なぜか今起きている。

既にゲームシナリオから大幅に外れている中で、山場のイベントが前倒し——どうなっているのか皆目見当がつかないが、これは却って好機なのかもしれない。

今回空賊退治を依頼してきたカーラと、その空賊の背後にいるのはオフリー伯爵家——オフリー嬢の実家だ。

ゲーム終盤の戦争の布石にもなっている空賊とオフリー家をこの機に潰してしまえば、リビアを苦しめるオフリー嬢やその取り巻き共を学園から追い出せる。

そしてキーアイテム【聖なる首飾り】も手に入れられる。

この機を逃せば、またリビアやアンジエが辛い思いをするかもしれないし、聖なる首

飾りを手に入れられる機会は巡って来ないかもしれない。

それに——二年生の半ばまで放置していればその間も空賊共は暴れ回って被害を出すだろう。

ならば、叩ける今のうちに叩いておくのが効率的だし合理的だ。

俺はそう結論付けた。



「ウイングシャーク」とかいうモンスターみたいな名前の空賊団の討伐はすぐに終わった。

攻略対象のうちの二人、「ブラッド・フォウ・フィールド」と「グレッジ・フォウ・セバーグ」という予想外の助っ人もあったが、全く有り難くはなかった。むしろ邪魔だ。

だから船賃代わりにイカサマトランプで金を巻き上げて役に立つてもらった。

金蔓の役にしか立たないとは、空賊討伐が聞いて呆れるな。

実際、最初に空賊と接敵した時、二人は何をするのかすら分からずにいた。

これだから粹がるだけのボンボンはい！

まあそれはさておき。

最初に現れた一団をあっさり蹴散らしてウェイン領に着いてみたら、いきなり銃を向けられて囲まれたので、俺たちは話が違くと抗議した。

カーラが助けを求めてきたから来たのに銃を向けてくるとは何事か！ってね。

そしたらカーラの親父さんが娘を庇って誤魔化そうとしてきたので、ちよつと脅しかけたら、カーラは洗いざらい白状してくれた。

オフリー嬢の仕業だった。俺たちを騙して空賊に襲わせる算段だったらしい。

やつてくれるじゃないか。

リビアを帰省させておいて正解だった。計画ではリビアも空賊討伐に巻き込んで、万一の時は責任を押し付けることにしていたらしいし。

というか、今回の俺、超ファインプレーじゃないか？

『単なる偶然をこれ幸いと自分の手腕と捉えるとは、感心ですね。さすがはマスターです』

ルクシオンは相変わらず辛辣だった。

翌日。

俺たちは残る空賊本隊を探していたが、お誂え向きに向こうから攻めて来てくれた。

さすがに本隊とだけあって数が多く、おまけに頭と思しき奴がアロガンツと同じくら

い大きなパワータイプの鎧に乗っていたので、少しばかり苦戦したが、勝利できた。

不本意ながらも空賊から奪った鎧に乗せて戦闘に参加させたブラッドとグレッグも思いの外、よくやってくれた。ちよつと見直したよ。

俺たちは分捕り品の飛行船と鎧、そして空賊が貯め込んでいた財宝を手に入れたが、俺の目的は別の物だ。

空賊の頭が持っていた「聖なる首飾り」。これをリビアにどうやって渡そうか。

誕生日プレゼント？ そういえばリビアの誕生日っていつだ？ もう過ぎてたらこの手は使えない。

クリスマスプレゼント？ それもダメだ。この世界にクリスマスはない。

攻略対象の誰か——例えばブラッドかグレッグをリビアとくつつけて渡させるか？

——難しいだろうな。あいつらはマリエに夢中だし。

結局俺があいつらの役割を代行しなきゃいけないってことかよ。

それもこれもあのマリエが逆ハーレムなんか作ってリビアのポジションを奪うからだ！

本当に何なんだあの女は！

悶々としていたら、オフリー伯爵家の艦隊が迫ってきてまた小競り合いになった。

どうやら空賊と繋がっていた証拠を取り返そうと追ってきたらしい。

俺は逃げることにした。

目的のものは手に入れたのだ。これ以上の戦闘は無用と判断した。

どうせ押収した証拠を王宮に突き出せばオフリー伯爵家は潰される。俺が手を汚すまでもない。

パルトナーの機動力は優秀だった。

空賊から分捕った財宝やら鎧やらを貨物室に詰め込み、大小の飛行船を七隻も引つ張りながら、オフリー艦隊を振り切ったのだ。

向こうは鎧を出してきたが、俺とブラッド、グレッグの三人で撃退した。



報告書を書いて押収した証拠と一緒に王宮に提出し、手に入れた飛行船と鎧はスクラップパーギルドに高値で売り飛ばし、捕らえた空賊はジェナがアプローチしていた男子の実家に鋳夫として売り渡した。

目的のものは手に入れ、おまけにだいぶ儲かった。

学園に戻ってきたリビアは久しぶりに家族と過ごせて嬉しかったのか、だいぶ元気になつていた。

アンジエとも無事に仲直りできたらしい。

よかったよかった。

——ここまではいい。

「どうしてこうなったああああ!!」

俺はまたも意に反した出世をしてみました。

なんと、「空賊退治に加え、ブラッド、グレッグ兩名の実家との復縁に貢献——」なる理由で六位上の宮廷階位が五位下にながってしまったのだ。

「くそっ！やっぱりあいっら俺のこと嫌いだろ！」

存外まともに戦ってくれた上に、実のところ努力家で色々考えているのだと分かったブラッドとグレッグを元の地位に戻そうと考えたのが間違이었다。

攻略対象の代役からいつか降りられると期待して、わざわざあいつらの廃嫡を取り消させる工作をやったというのに！出世するだなんて望んだ結果と真逆じゃないか！

『まさか昇進するとは思いませんでした。マスターは私の予想の斜め上を行くのが得意ですね』

ルクシオンが昇進を告げる書状を読んで言う。

「得意ってなんだよ！あの流れでなんで昇進になるんだよ！」

憤慨する俺にさらなる追撃がかかった。

「バルトフアルト男爵、お手紙と贈り物が届いております」

男子寮の女性職員が緊張した様子で俺に頭を下げる。

職員の案内で外に出てみたところにあつたのは——豪華な大型エアバイクだった。エアバイクと手紙の差出人はアトリー家。クラリス先輩の実家だった。

手紙には学園祭での一件の謝罪とクラリス先輩が元気になったこと、そして——

「う、嘘だろおい——」

俺は力が抜けて膝をつく。

『五位下から五位上への昇進は卒業までお待ち下さい』

手紙の最後にはそう書いてあった。

嗚呼、夢にまで見た領地でのんびり引きこもり生活が手の平から零れ落ちていく。

「そうだ。旅に出よう。知らない国へ冒険の旅に出る」

現実逃避する俺にルクシオンは容赦なく現実を突きつける。

『明日から授業なので無理です』

「あーそうでしたそうでしたねえ！ちつくしよおおおおお!!」

「思わず窓を開けて抱えてる想いをひたすらに叫んだ俺はそれをリビアとアンジエに見られてしまったのだった。」



「全く——気が狂ったのかと思つたぞ」

アンジエがドン引きした目で俺に言う。

うう、穴があつたら入りたい。

つてか、いつそ誰か俺を殺してくれ！

「あ、あ、あ、あ、あ、あ!!もうこんな世界嫌だあああ!こんな人生嫌だあああ!来世は日本で平穩無事なモブライフを送らせてくれえええええ!!」

俺のこの叫びは通りがかりのリビアとアンジエにバツチり聞かれていた。

くそ。よりにもよつてこの二人に聞かれるとは!不覚だ。一生の不覚だ!

『後先考えずに衝動的に行動し、激情をほとばしらせた結果、しつぺ返しを食らう。いつものマスターですね。抱腹絶倒もののギャグ体質です』

人の不幸を嘲笑うとか、底意地悪すぎだろこの人工知能！誰貴に似方やがでったす!?」
「えっと、リオンさん、偉くなつて嬉しくないんですか?」

リビア、やめてくれ。俺に何を期待しているんだ。

俺はただの引きこもりたいモブだぞ。

「偉くなればその分負担も増えるんだよ。俺にはそんな負担背負えないよ!」

この二人の前ではこんな愚痴言いたくはなかったのだが、バレてしまったのは仕方ない。

この際、少し俺から距離を取ってもらおう。

今までこの二人と親しくし過ぎた。

どう足掻いたってリビアは平民で将来は聖女様、アンジエは公爵令嬢で俺と結ばれることは決してない。

俺は俺の身の丈にあつた相手を早く見つけなければならぬ。

——憂鬱な婚活がまた始まるな。

次のお茶会には誰を招待しようか——

俺は洗いきらい白状した。

本気で出世したくないこと、高度な政治判断など抜きにして俺が出世しないために功

績を押し付けたこと、学園を卒業したら貯めた銭コアで領地に引きこもつてのんびり暮らしたいと思つてること——そして出世すると余計に婚活やら貢献やら何やらがキツくなることへの愚痴。

出来るだけ情けないヤツに見えるよう演技したつもりだった。

今まで俺に抱いてきたであろう幻想を全部ぶち壊す気で。

「リオン——」

アンジエが何か言おうとする。

あまりダメメージのない言葉だといいけど。

「ありがとう」

ん？聞き間違いか？

「え？あり——がとう？えっ？」

予想外の答えに狼狽する俺に苦笑しつつもアンジエは優しい表情で言った。

「決闘の時、代理人に名乗り出てくれてありがとう。——私と一緒にいてくれてありがとう。あの時間は楽しかったぞ」

——やめてくれよ。未練が残つちまうだろうが。

「だから——お前はもう一人で我慢するな。自分の望みに正直に生きろ。望まない出世をすることも、余裕がないまま私たちと時間を過ごすことも——負担になるというなら

やめていいんだ」

——なんでだよ。

なんで前世も含めれば四十年近くも生きてる俺が十六歳の女の子に諭されてるんだよ。

「わ、私も、リオンさんといられてよかったです！あの時——最初にお茶会に誘ってくれた時、すごく嬉しくて、ほっとしたんです」

リビアの純粹な声が刺さる。

「私には何も無いのに、純粹な厚意で助けてくれて、お金もかかるのにお茶会に招いてくれて、私には何もお返しができなくて、それでもリオンさんは笑顔でした。だから私、リオンさんにはずっと笑っていて欲しいんです」

——なんだよ。なんで二人とも、そんなに俺に優しいんだよ。

俺は泣いた。

モブに厳しいこの世界でこんなに優しくされたのは初めてで、あんな情けない振る舞いを見せても軽蔑の目を向けてこなかった二人が尊すぎて——

そしてそんな二人と結ばれないのが悲しくて、悔しくて、泣いた。

ターニングポイント

夢を見ていた。

まだ彼との幸せな未来を信じていた頃の夢。

自分の瞳の色と同じ、初夏の若葉を思わせる緑色の髪と瞳。艶のある落ち着いた声。その声で紡がれる美しい言葉の数々——全部大好きだった。

それらが目の前にあって——周りは美しい公園の景色。

ああそうか——私はずっと悪い夢を見ていたのか。こつちが現実で、今までののが夢。そうだ。そうに決まっている。優しい彼があんな酷いことをするわけがない。

だってほら——今だって私の手を握って、こんな眩しい笑顔を向けてくれている。彼が湖の方を指差して行こうと誘ってきた。

頷いて、一步踏み出した——瞬間足元の地面が消えた。

悲鳴ひとつ上げる間もなく、真つ暗な穴に深く深く底知れず落ちていく。

繋いでいたはずの手は離れてしまった。

暗黒に独り吸い込まれていく。怖い。

誰か——誰か助けて。

気付けばそこは学園の教室だった。

怖いくらいに赤い夕陽が差し込む教室で、彼が私に頭を下げる。

「この度のことは本当に申し訳ありませんでした」

——悪夢じゃなかった。現実だったんだ。

この光景を私は知っている。つい三日前に起こったことなのだから。

どうして——どうして幸せな夢に逃げ込ませてくれなかったんだろう。

なぜ、私にまたこんな光景を見せるの？

ほら、私が怒鳴っている。

こんなみつともない姿、見られたくないし見たくもないのに。

「他の女性を愛した私が貴女と結婚するなど失礼です。嘘を吐くのが——貴女の前で嘘を吐くのが嫌でした。私は他の女性を愛してしまいましたから」

その言葉が辛うじて持ち堪えていた最後の堤を決壊させた。

激情の波が、理性を乗り越え、今までどうしても言いたくなかった言葉が喉から飛び出した。

「何が嘘よ！あんな女に誑かされて！私を捨ててまでそんなに欲しかったの？どうしてあの女なのよ？どうして——私じゃ駄目なのよ」

痛い。胸が痛い。

溢れて——零れ落ちていく。怒り、恨み、悲しみ、絶望——希望、願望、夢見た未来、女の矜持——何もかも。

——残るのは惨めさだけだ。

目が覚めた。

広いベッドに一人。

一つに戻った枕は若干湿気っている。

「まだあんな夢見るなんて——」

心の奥底ではまだ引きずっているのだと気付かされて、クラリスは嘆息する。

この期に及んでまだ自分は今までのことが全部夢で、目が覚めれば幸せだった日々が戻ってくる、そんな願望を捨て切れていないらしい。

手紙一つで一方的に婚約を解消されて、考え直すよう説得しようとしても無視されて——自分が壊れてしまえばさすがに驚き心配して自分のところに来てくれるのではなか、という希望も虚しく、最後の最後まで拒絶され続けたにも関わらず。

これではまるで沼に嵌って抜け出せずに苦しむ小鹿のようだ。

もがけばもがくほど脚を取られ、そしていずれ力尽きて深く沈んでいく。

早く抜け出さなければならぬ。

そう簡単ではないとしても、何か別のことをして別のことを考えて、未だ心に棲みつく彼の存在を追い出さなければならぬ。

身体を起こして洗面所に向かう。

顔を洗い、化粧水と美容液と乳液を使い、愛用のブラシで髪を梳かす。

ついこの間まで億劫でサボりがちだったが、彼との関係にけじめをつけてからはまた毎朝欠かさずするようになっていた。

おかげで荒れていた肌と髪も息を吹き返している。

食堂で家族と共に朝食を食べてから、身支度を整えて屋敷を出る。

せつかくの連休なのだ。

ゆっくりシヨップングでもして気分を変えようと思った。

向かった先は高級繁華街。

こんなことになる前は時々私服やアクセサリーや化粧品を買いに来ていた場所だが、一人で来るのは初めてだ。

これまでは護衛や取り巻きがいとも周りを固めていて彼女たちが入る店も選別していたせいで窮屈な思いをしていたが——今日はどこに行こうと自由だ。

尤も、見えないだけで護衛の一人や二人はついてきているのだろうが。

しばらくショーウィンドウに並ぶ数々の衣装を眺めながら歩いていると、いくつか興

味を惹かれるものが見つかった。

店に入って試着してみる。

この際思い切り楽しんで朝の憂鬱な気分を吹き飛ばそうと、次から次へと目についた服を試着し、気に入ったものはすぐに買った。

店を出た時には服を着替え、紙袋を二つも提げていた。

少し重い、後悔はない。うるさく口出ししてくる取り巻きはおらず、自分の目的と好みに合わせて買えた服。

特に気に入ったものは今着ている。秋らしく落ち着いた色のモノトーン——これまでなら地味すぎるだの安っぽいだの言われて着られなかっただろう。

ようやく楽しい気分になってきたところで、ふと視界の隅を何かが横切った。

それは青白く光っているように見えたが、蝶のように羽ばたいているようにも見えた。

思わずそれが消えた方向へと視線を向けると、そこは路地だった。

ほんのちよつと、冒険心が湧いた。

いつもなら絶対に入らないし、これから先入ることもないであろうその場所に、なぜか惹きつけられて、そつと足を踏み入れた。

「いらつしやい」

路地の最初の角を曲がったところでいきなり声をかけられた。

声のした方を見ると、着古した黒いスーツにシルクハットの男がニコニコと笑いかけてきていた。

「どうです？ 運勢を見ていきませんか？ 今なら特別価格で占つて差し上げますが」

その笑顔と猫撫で声が胡散臭く感じてクラリスは踵を返す。

「興味ないわ」

だが男は諦めるどころか、心に刺さる追い打ちをかけてきた。

「貴女——もしや捨てられたのではありませんか？ それも大切な人に——見えていますよ。貴女の情愛の残り火が」

足を止める。

初対面でなぜそれが見抜かれたのか——気味が悪い。

だがそれと同時に僅かながら惹きつけられる。まさかこの男本物の占い師なのか、と。

思わず振り返つたクラリスを見て男は目を細める。

「ああ——当たりですか。怒り、憎しみ、悲しみ、後悔——貴女のそれは誰かへの愛情が裏返つたものに見えます」

「——だとしたら、どうだということのかしら？占って、それで何になると？」

男の物言いに苛立ち、つい放った意地悪な問いに、しかし男はニンマリと笑う。

「貴女の望む未来を掴む手がかりをお教えできます。見たところ貴女は既に闇の中から抜け出して未来に目を向けている。そして望む未来も既に自分の中にできあがりつつある」

そして男は建物の扉を指し示した。

「中で詳しいお話を聞かせて頂ければより具体的な助言ができますが——いかがですか？」

クラリスはしばしの逡巡の末、男の言に乗った。

「貴女は色恋沙汰は不得手であられるようですね」

クラリスから詳しい話を聞いた占い師の男はそう言った。

「貴女は聡明かつ情に厚い素晴らしい氣質の持ち主。更に見目麗しく、品行方正——女人としてほぼ完璧に近かったでしょう。その上彼を全力で愛し、支え、尽くした。ええ、まさに傍から見れば貴女は多くの男が夢見る理想そのもの——それこそが彼の重荷となつたのです」

「それは——どういうこと？」

理想そのものであったが故に重荷になる——そんなことを聞いたのは初めてだ。

「貴女はどこか彼に夢を見ていたようですが——彼とて一人の男です。プライドを喰つて生き——寄りかかってきて、自分を強く、頼りがいのある存在と感じさせてくれる異性を愛する——そんな性を持っているのです。然るに貴女はそうはなれなかつた。どれをとつても完璧に近い貴女は、彼をして自分がいなくとも何ら問題なく生きていけると思わせた。彼の女のように庇護欲を掻き立てることは終ぞなく、むしろ煩わしく思うことすら度々あつたでしょう。貴女が負けたのはそれが原因です」

その言葉はかさぶたができていた傷を抉つてそこに塩を揉み込むようなものだった。「私——私は……彼のために頑張つてそうなつたの！彼に相應しい者にならないと——そう思つて——ただそれだけだったのに——」

溢れ出た涙で視界が滲む。

喉がつかえて言葉が出てこない。

彼のために努力して、横に立つに相應しい淑女になつて、その結果彼に煩わしいと思われて捨てられるなど納得が行かない。

しかし現に捨てられたせいで反論もできない。

「なるほど——つまるどころ、貴女は彼に一方的に貢いでいたのです。人は己に貢ぐ者を恋うることはありません。されど己をして貢がせる者に心奪われ、これを追い求めま

す。これが恋の心の妙です。貴女はやり方を間違えた」

「だったら！どうすればよかったの？私は——あの女みたいにしていけばよかつたつて
いうの——」

やり場のない怒りと悔しさを思わず占い師にぶつけてしまったが、占い師は涼しい顔
で答える。

「どうにもなりません。過ぎた過去は変わらないように離れた気持ちも戻らない。それ
に貴女にその女の真似は無理でしょう。ですが、貴方に合った男の落とし方は必ずあ
る。それを知れば、次の機会をしつかり掴み取れるでしょう。どうです？その方法が何
か、次の機会はいつか、知りたいと思いませんか？」

クラリスは思わず頷いた。

「よろしいでしょう」

占い師はほくそ笑んで呪具が入っているらしい袋を手を取った。

「運命が——今変わる！」

掛け声と共に袋の中身がテーブルにぶちまけられる。

その晩、クラリスは部屋の大掃除を行った。

彼との思い出の品、彼の存在を思い起こさせる物を一切合切処分するために。

彼の写真、やり取りした手紙、彼が贈ってくれたアクセサリー、彼とのデートによく着て行つた服、彼好みだという理由で使つていた香水——その全てを容赦なく袋に放り込んだ。

頭を過ぎる思い出に胸が痛んでも、止めることはできなかつた。

ここで止めてしまつたら、彼との日々を思い出す品を一つでも残したら、永久に彼に囚われ続ける——そんな気がした。

そしてすぐそこに迫っている機会を掴む算段を考えるためにも、部屋と頭を整理しておきたかつた。



連休が終わり、また授業が始まつた日。

昼休みに女子にお茶会の招待状を渡そうとしてまた失敗した俺は意気消沈したまま中庭のベンチに座り、売店で買ってきたジャムパンを一人寂しく食べていた。

ただでさえ望まぬ出世でダメージを受けているのに、見下されて嗤われるのは堪える。

「仲良しの平民はどうしたの〜って——こっちの気も知らないでさ」

思わず愚痴を漏らすと、すかさずルクシオンが皮肉を返してくる。

『その台詞を言いたいののはあの二人の方では?』

「どういう意味だよそれ。俺にもあの二人にもそれぞれの道があるんだから、今のうちからそれに向かつて踏み出さないとだろ。別に今後一切関係を断つてわけじゃない。適切な距離に戻しただけだ」

既にストーリーを大きく外れてしまっている。少しは修正しておかないと後が怖い。アンジエはともかく、リビアには今のうちに俺以外の——できれば期待外れのブラッドとグレッグ以外の攻略対象と交流を持って欲しい。

そしていずれはくつついて、ゲームのシナリオ通りに世界を救ってもらわないと。

それはリビアにしかできないことで——俺ではいつまでも攻略対象の代役を務めてはられないのだから。

そのために雛鳥に巣立ちを促す親鳥のような真似をした。

ルクシオンは何やら言いたげにじっと俺を見ていたが、やがて一つ目を逸らした。

『——そうですか。おや?誰か来ますね』

ルクシオンが光学迷彩で隠れると同時に俺の前に一人の女子が現れる。

「ここにいたのね。リオン君」

見上げた俺は呆気にとられる。

「クラリス先輩?」

そこにいたのは髪型以外は以前の優等生スタイルに戻ったクラリス先輩だった。

元気になったというのは本当だったようで、学園祭の時よりも顔色が良く、表情が柔らかい。

「隣、いいかしら?」

「あ、ハイどうぞ」

少し座る位置をずらしてベンチを空けると、クラリス先輩は隣に座ってきた。

——何この状況。俺この後何かされるのか?

それとなく周りを見回したが、取り巻きや専属使用人の姿は見えない。

「食事中のようだけど邪魔だったかしら?」

クラリス先輩がジャム・パンを見て言った。

「いやそんなことはないですよ。ちよつと野暮用があつてお昼遅くなっちゃつて——」

「ふーん——誰かお茶会に誘つていたの?」

問いかけに俺は頷く。

「そうですよ。断られちゃいましたけどね」

自分でも何を言っているんだと思つたが、クラリス先輩は事情を察してくれたようだった。

「それは残念だったわね。私なら喜んでお受けするところだけれど」

「フオローありがとうございます。嘘でも嬉しいです」

「あはは——元気出してね」

きつと冗談カリップサービスだろうが、それでも優しきは沁みる。

クラリス先輩は苦笑いしていたが、やがて本題を振ってきた。

「学園祭の時はごめんなさいね。巻き込んだ上に手間かけさせちゃって」

「それはもういいですって。過ぎたことですし、それに俺が自分で関わったんです。気にしないでください」

エアバイクレースに出たのは保身のためだし、ジルクとクラリス先輩の確執を終わらせたのはこの先更なる面倒事が起こるのを防ぐため。

ほとんど自分のためだ。

「——そう。ありがとう。おかげで気持ちが軽くなったわ」

クラリス先輩はそう言ってポケットから何かを取り出して渡してきた。

「今度ゆつくりお話ししたいことがあるの。明後日の放課後、お茶会に来てくれるかしらっ」

「え？そ、それはいいですけど——」

「よかった。じゃ、待っているわね」

有無を言わさずといった感じに席を立て歩き去るクラリス先輩。

俺は面食らったままその背中を見送るしかなかった。

『おや、喜ばないのですか？女子の方からお茶会に誘われたというのに』

姿を現したルクシオンが問いかけてくる。

「いや、驚きの方が大きいよ。今までなかったことだからさ」

そう、お茶会に招待されるなんて初めてだ。

普通お茶会というのは男子が女子を誘うもので、男子は招待される側にはならない。

男同士でのお茶会はどうなのかって？

それはお茶会じゃなくてただの集まりだ。

予定が合うときに何となく集まって好きなものを飲み食いし、駄弁るだけ。大層な準

備はしないし、招待状なんて出さない。

そういうわけだから男子である俺にお茶会への招待状が来ることはあり得ないはず

——だったのだ。

「行かない——ってわけにはいかないよな」

渡された招待状を読んで呟く。

そこには綺麗な字で日時と場所、そして「クラリス・ファイア・アトリー」の署名が書かれていた。

話したいこととは何なのか分からないからちよつと怖いが、断るのも怖い。

クラリス先輩の招待を断つたなんて知れたら忠誠心あふれる取り巻き連中が押し掛けてきかねない。

ジルクみたいな目には遭いたくない。

ルクシオンが冷静な分析結果を伝えてくる。

『深読みしても意味はないかと。行つて確かめるほかないのでは?』

「でも俺、招かれた側の作法とか分からないぞ。今までの女子なんて参考にならないし——」

『招待する相手を間違えていましたね。マスターがこれまで招待状を送つてきたのは男爵家から子爵家の女性です。一番酷い層ですよ』

「そうだけど、俺は男爵だぞ。その層からしか嫁は貰えないんだつて。何度も言つたら?」

ルクシオンはボディを傾けてチラツと招待状を覗き込んで、言った。

『——いつそのこともう一度大きな功績を立てて子爵にまで陞爵してはいかがですか? そうすれば伯爵家以上の女性が選択肢に入りますよ。——クラリスも』

「え?」

クラリス先輩と結婚——クラリス先輩は確かに良い人だと思ふが、さすがに無理があ

る話だ。

これ以上出世するなんて御免だし、万が一俺が子爵になつたとしても、アトリー伯爵家がクラリス先輩を俺に嫁がせるなんて認めてくれるわけがない。

アトリー家は代々大臣を務めてきた家系だ。身分上は結婚できてもやはり格が違ひすぎる。

「いやいや、どう考えても家の格的に釣り合わないだろ。そもそも一代で男爵から子爵とかさすがに——」

準男爵でバルトファルト家の寄子になるはずが、仮とはいえ入学前から男爵の地位を与えられ、今や正式な男爵で宮廷階位は五位下、卒業したら五位上。

一代でこんな出世は聞いたことがない。

これ以上出世させることはさすがにない——はずだ。

『どうでしょう？ マスターのその手の予想が当たつたことは一度たりともありませんが？』

相棒が不吉なことを言う。

「言わないでくれよ。心配になるだろ」

せつかく功績を譲つてやったのに変な気を遣つてくれやがったブラッドにグレッグ、そしてなぜかアトリー家から推薦されて六位の壁を越えたばかりか、四位の壁まで見え

てきた。

俺には——いや、それどころかルクシオンにすら——こうなることは全く予想できなかった。

同じようなことが今後二度とないかと言われると——不安になる。

二度あることは三度あるっていうくらいだし。

そう考えていたら予鈴が鳴った。

俺は急いで昼食の残りを平らげ、教室に戻る。



お茶会当日。

クラリス先輩が俺を呼んだ部屋は小さいが見晴らしのいいお洒落な部屋だった。

学園の建物にあるお茶会用の部屋の中でもかなりグレードが高い部屋だ。

ノックすると、返事が聞こえてクラリス先輩が出てきた。

「リオン君。来てくれたのね。ありがとう」

クラリス先輩は前とは見違えるような優しい表情でそう言った。

「え、えっと——その、クラリス先輩、随分見違えましたね」

どもってしまった。

でも仕方ないと思うんだ。ギャルとか不良みたいな格好でも似合うくらいだったクラリス先輩がちゃんとオシヤレしてたら——アンジェといい勝負の美人さんだった。

アンジェと違って見慣れていないので緊張してしまう。

「ふふ。ありがとう。さ、座って。今お茶を淹れるから」

クラリス先輩が部屋の中央のテーブルを示した。

「お邪魔します」

今までマトモな女子がお茶会に来なかったこともあって、招かれた側の作法が分からない。

リビアやアンジェを呼んだ時はフランクな感じだったし。

「そう畏まらないでいいわよ。二人だけだしね」

クラリス先輩がフォローする。

確かに部屋にはクラリス先輩と俺の二人だけ。取り巻きも専属使用人もいない。

「えっと？ 使用人はどうしたんですか？」

俺は思わず質問する。

クラリス先輩はティーポットにお湯を注ぎながら答えた。

「——全員解雇したわ。貴方の言った通りにね。本来私にはあんなのは必要なかった

の

それは喜ばしい。他の女子も是非そうしてくれとありがたい。

専属使用人共の舐め腐った態度にはつくづく腹が立っていたところだ。

「そうですか。それで、今日はどういった話で？」

「まあそう急かささないで。まずはティータイムを楽しみましょう」

クラリス先輩はそう言つて優雅な仕草でポットに茶葉を入れ、お湯を素早く注いで蓋をし、脇に置いてあつた砂時計を返す。

無駄のない洗練された動き。惚れ惚れする。

師匠が紳士ならクラリス先輩は淑女つてところか。

「お茶請けはどれがいいかしら？」

クラリス先輩がケーキスタンドの前に立つ。

並べられたお菓子はどれも美味しそうだ。迷つてしまう。

「——クラリス先輩のおすすめで」

結局日和つた。

「それじゃこのレアチーズケーキをどうぞ」

クラリス先輩はナイフを手に取ると、真っ白な丸いチーズケーキを切り分けて皿に載せる。

なんてことだ。ケーキを切る姿まで優雅で華麗じゃないか！
学園の女子のこんな姿見たことないぞ！

「頃合いね」

クラリス先輩は銀製の茶漉しをセットしてカップにお茶を注ぐ。

(なっ!?)

またしても衝撃を受ける。

俺のお茶とは漂ってくる香りからして違う！

「さあ、召し上がれ」

クラリス先輩のお許しが出たので俺は即座に一口飲む。

(すごい！)

俺の淹れたお茶より格段にハイレベルだ。

やはりお茶を始めたばかりの俺とは年季が違うってことか！

「いかが？」

クラリス先輩が得意そうな顔で感想を求めてくる。

「すごいです！緑残る干し草のような香ばしさとお香のような甘さが醸し出すハーモニーが絶妙です！」

仰々しいが、何のことはない。師匠が使っていた表現の受け売りを組み合わせただ

け。

語彙力の無さがもどかしい！

「口に合ったようね。淹れた甲斐があるわ」

クラリス先輩が満足げに微笑む。

女神かこの人！

俺はしばし話そつちのけで夢中でお茶とお菓子を堪能した。

そんな俺をクラリス先輩は微笑みながら見つめていたが、俺が少し落ち着いたタイミ
ングですかさず切り出した。

「リオン君、修学旅行の行き先はどこにするの？」

その質問に思わずカップを持つ手が止まった。

選択

問題：これまでほとんど接点がなかった女子の先輩からお茶会に招かれ、その席上で修学旅行の行き先を問われました。先輩の意図を読み取り、適切なりアクションを取りなさい。

お茶とお菓子で緊張を解されて気が緩んだところで、いきなりこんな問題を出題された。

え？話したいことってこれのことだったのか？

でもなんでクラリス先輩が俺の修学旅行先なんて知りたがるんだ？

もしかして俺と同じところに行きたがっている——とか？

いやいや待て早まるな俺！単に世間話程度の質問かもしれない。変に深い意味を期待したら手痛いしつぺ返しを受けかねない。

大体クラリス先輩と俺はこの間のエアバイクレース騒動で知り合ったばかりだぞ。

たしかにクラリス先輩はその時酷く落ち込んでいて、見ていられなかったから俺なりにフオーローはしたけど——それだけだ。

でも、わざわざお茶会まで開いて呼びつけてまで世間話程度でこの質問って、それあ

り得るのか？

そんな思考を一秒ほど経て、とりあえずストレートに答えることにした。

「カンナですけど」

ゲーム内ではたしか南の方にある温暖な浮島で日本風な街並みと文化がある所だった。

「人気の高い所を選ぶわね。やっぱり夏祭り目当てかしら？」

クラリス先輩は更に質問してきた。

夏祭りとかやっていたのか？今二学期で秋、もうすぐ冬だよな？

「夏祭りって——夏はもう過ぎてますよね？」

「知らないで行こうとしていたの？季節が違うのよ。あつちは今は夏なの。ちなみに他の行き先も同じよ」

こつちが秋で向こうは夏——北半球と南半球で季節が逆、みたいなやつか？

この世界はよく分からない。気候とかどうなっているんだか。

難しそうだから別に詳しく知りたいとは思わないけど。

「祭りですか——楽しそうですね」

嘘である。

実際には夏祭りとやたらに興味はほとんどない。

なのにその島に行きたがる本当の理由はステータスの成長率が劇的に向上するレアアイテムが手に入るからである。

ゲームでは最も効率的にキャラクターを育成する方法がそのレアアイテムを使うことだったのだ。是非とも一年生のうちに手に入れておきたい。

安全を第一に少ない労力で最大の利益——それが俺の理想だ。

だがそんなことを言ったら確実に頭が変だと思われる。

ついでに言うのと抽選に漏れないように教師の買収を企てているなど——自分から見ても正直ちよつとドン引きする。

クラリス先輩は気のない返事をした俺を少しの間見つめていたが——

「ねえリオン君、ウルクラムのビーチに興味はないかしら？」

唐突に別の目的地を提示してきた。

修学旅行の行き先の一つにそんな名前のリゾート地があるが、俺はさして気に留めていなかった。

「ビーチですか？まあ、泳ぐのは嫌いじゃないですけど——」

「分かっていないわね。ウルクラムにはね、地上に海があるのよ」

「地上に海、ですか？それってどういうことなんです？」

「浮島の半分以上が大きな湖で、その水は海と同じ塩水なの。珊瑚礁や瀑布もあって、

すごく綺麗なのよ。それから海の家っていうのもあって、その料理がまた絶品なんですって——」

クラリス先輩は目を輝かせて饒舌に語ってくる。

その様子を見て、ふと既視感を覚えた。

頭をよぎるのは、家に籠ってギャルゲーをやり込んでいた前世の休日の記憶。

ルートの数が多くて、隠し要素があちこちにある、やり込み要素が強いやつをプレイしていたことがあった。全キャラ全ルート全隠し要素制覇を目指して、何周も回して、何度もヒロインとの会話をこなして、何度も同じ光景を見て、台詞どころかスチール画の背景とか小物まで覚えてしまうくらいやって——

——今のこの状況、そういうギャルゲーで見たパターンに似ていないか？

二週目とかで新しい選択肢が出てきて、それを選んだ先でさらに分岐と好感度イベントが出てきて、そこから隠しキャラルートが始まって——

——って何を考えているんだ俺は！いくら乙女ゲー世界とはいっても二次元とリアルをこつちやにするな！

思い出せ。女性に優しいフワフワした設定の乙女ゲー世界が、現実になるとどれだけ酷かったかを。

ゲームのような恋愛はできないと俺は知っていたはずだ。

クラリス先輩みたいな美人で身分も高くて聡明で優しい素敵な女性に、ビーチでのデートに誘われるなんて展開、俺のようなモブには――

「それでね？リオン君さえよければだけど、一緒にウルクラムに行かない？」

――まさか本当にあつたとは。

――どうしよう。

断りたいが、どう言つて断ればいい？

まさかカンナでしか手に入らないレアアイテムが欲しいからなんて言うわけにもいかない。

「――少し考えさせてください」

俺にはそう言うのが精一杯だった。

「そう。じゃ、待っているわね。返事は急がなくていいから」

クラリス先輩はにっこり笑つて言った。

――不味い。ものすごく断りづらくなつただけだ。



お茶会が終わつて、俺は中庭のベンチで黄昏ていた。

「ままならないもんだよな——」

呟く俺にルクシオンは言う。

『ままならなくしているのはマスターでは?』

「はあ? どういうことだよ?」

『そのままの意味ですが? ジルクの代役としてエアバイクレースに出るまではともかく、クラリスとジルクとの間にあつた確執の解消は明らかに過ぎた行いでした。本来であればそれは当人同士で解決するものだったはずです。そこに首を突っ込んだがために、マスターはクラリスから不本意な誘いを受けているのです』

ルクシオンの説明に俺は思わず反論する。

「そうは言つても、あのまま放つておくわけにもいかないだろ。当人同士で解決なんてそれこそ何度もやろうとしてできなかったことなんだからさ」

『そう言つて自分一人の考えで痛い目を見てまで他人を助ける。マスターはそれで問題を解決して終わりですが——助けられた方がその行動をどう思うか、考えているのですか?』

ルクシオンの指摘に思わずきりとした。

考えてみれば今まで自分の行動が相手やその周囲にどう受け取られるかなんて、いちいち考えてはいなかった。全くどうでもよかつたというわけではない。ただ目の前の

問題を解決するのに頭がいっぱいで頭から抜け落ちていた。

『——思い当たる節があるようですね。アンジェリカが起こした決闘に首を突っ込んだ時、それはマスターからしてみれば鬱憤晴らしと婚活に悩む学園生活からの逃走に利用したに過ぎないとしても、彼女や彼女の実家からすればまさに地獄で仏だつたでしょう。結果、彼女の実家がマスターの行動に報いるべく行つた宮廷工作はマスターを予想外の出世に導きました。空賊退治の時もそうですね。上げてもない手柄を譲られ、大金を投じた工作によつて廃嫡を取り消されたブラッドとグレッグ、及び多数の贈答品と息子への箔付けを得た二人の実家はマスターの行動に報いる必要性を少なからず感じただでしょう。真意がどうであれ、その破格の取り計らいには相応のお返しをしなければ彼らの矜持と品位が損なわれます。それがマスターの再びの出世へとつながりました。さて、この二つの事例を踏まえた上で考えてみましょうか。マスターがクラリスにしたことに対して、クラリスはどう感じ、何を思つたでしょうね』

「——めちやくちや感謝してる、よな？それでお礼がしたい、と」
俺の答えにルクシオンはなぜか一瞬固まった。

そして一つ目を若干逸らして遠くを見るような感じで言った。

『そうです。ですが、一つ大きな見落としがあります』

「見落とし？」

『はい。ジルクとの間にあつた確執の解消、及び傷心状態のクラリスへの慰藉。それによつて——』

ルクシオンは逸らしていた一つ目を戻してきて、思いがけない結果を告げた。

『現在クラリスはマスターに好意を抱いています』

——聞き間違いだよな？

「何だつて？もう一度頼む」

『現在クラリスはマスターに好意を抱いています』

全く同じ言葉が繰り返される。

どうやら聞き間違いではなかつたようだが、俄には信じ難い。というか、ルクシオンの勘違いではないだろうか。

「え？なんでそんなことに？」

『あらゆる呼びかけに応じずに逃げ続けたジルクと、自棄を起こし攻撃的になつていたクラリスの両者を引き合わせて、その確執を終わらせるといふ難事をやり遂げたのはマスターです。誰もができなかつた——いいえ、やろうとしなかつたことを見返りも求めずに、また自身が負傷してまでやつてのけたのです。そして傷心状態のクラリスにか

た慰めの言葉——あれが決定的でしたね。他の人物が同じような言葉をかけたところで彼女の心には届かせられなかったでしょう。マスターは弱った女性に付け込むのがお上手ですね』

何やら聞き捨てならない言葉が聞こえたので思わず言い返した。

「ちよつと待て。訂正を求めろ！俺は付け込んでなんかいいねーよ！」

だがルクシオンは即座に反論してきた。

『客観的に見れば付け込んだとしか言いようがありませんが？それも今に始まったことではありません。オリヴィアもアンジェリカも今回と同様に落ち込んでいたところに手を差し伸べ、彼女たちが求めていた共感と慰めを与えました。その時の記録がこちらです。一度ご自身でご覧になってはいかがですか？』

そう言つてルクシオンが周囲に投影するのはありし日の俺の姿のダイジェスト映像だった。

『ねえ、その彼女！お茶していかない？』

『これだから損得で動く人間は嫌だな。もつと優しい心を持つたらどうだ？』

『大丈夫——代金は俺が持つから』

『分からないところがあるなら教えてあげようか？』

『はい、はーい！俺が決闘の代理人に立候補しまーす！』

『大丈夫です。俺、これでも強いですから』

『どうですか、お嬢様。見事に勝ってまいりましたよ』

『世の中、最高の復讐は自分が幸せになることですよ』

『同情を誘うような小芝居は止めてもらえますか。それに責任を追及しても面倒になるから嫌です』

『クラリス先輩もいい加減に立ち直ってくださいよ。男なんて星の数ほどいますよ』

『安心してください。良い女はその程度の汚れなんて気になりません』

『俺、正直者ですから嘘は吐かないです』

映像が終わる。

『いかがでしたか？落ち込んでいたところに颯爽と現れて問題を解決し、決して否定や非難をせずに落ち込んだ心に寄り添い、励ましの言葉をかける。好意を持たれても不思議はないと思いませんか？』

「——くそ、反論できねえ」

たしかにギャルゲーのプレイ動画でも見ているかのような好感度稼ぎの台詞とオンパレードだった。

——というか、あれ本当に俺なのか？見ててめちゃくちゃ恥ずかしいんだけど。

『ご理解頂けたようですね。さて、今度はマスターに好意を抱いた彼女たちに対してマ

スターがしたことを振り返ってみましょうか。オリヴィアとアンジェリカとはしばらく友人として交際を深めた後、突然距離を置きました。マスタアの言うゲーム上の都合から深入りを避けたいという事情を二人は知りません。そんな二人からすれば、マスタアが自分たちの存在を負担に感じ、突き放した形です。クラリスに対してはその事情すらありませんね。お茶会の招待に応じ、デートの誘いに対してどこか期待を持たせる形で返事を濁しています。好意を抱かせておきながら、それに応じるでも断るでもなく中途半端な対応。この先どうされるおつもりですか?』

「——考えてなかったな」

『早めに結論を出すことをお勧めします。気持ちに応じられないのであれば早期に明確な線引きを示しておく必要があるでしょう。そうしなければ——ジルクの二の舞です』

ズタボロになったジルクの姿を思い出して、寒気を覚える。

「——それは嫌だな。何とか穏便に断るか」

『それができれば、ですがね』

「え、それってどういう——」

訊き返そうとした時にはルクシオンの姿は消えていた。

そして直後に俺の前に人が現れる。

「バルトフアルト男爵。少し、いいだろうか」

声をかけられて顔を上げると、そこにいたのはエアバイクレースで鎬を削った首の太い三年生の先輩だった。

「貴方はこの前の——」

「【ダン・フィア・エルガー】だ。ダンでいい。少し、話せるだろうか？」

「——ええ、どうぞ」

簡潔に自己紹介したダン先輩はそのままベンチの前に立っていたので、横にどいてスペースを作る。

ダン先輩は「失礼する」と言ってから座った。

「クラリスお嬢様のことだ」

——やっぱりの話題だったか。

クラリス先輩に対する忠誠心が厚いこの人ならと予想はついていた。

「お茶会で言われたと思うが、クラリスお嬢様は修学旅行で男爵と行動を共にしたいと希望されている。どうかお嬢様の希望を叶えてあげて欲しいんだ」

「——それ、またクラリス先輩は関係ないってやつですか？」

「そうだ。迷惑をかけておいて厚かましいのは承知している。だが、どうかお願いだ。お嬢様と一緒にウルクラムに行って、良い思い出を作つてあげて欲しい」

思い出作り——そのフレーズで思い出したのはミレーヌ様のことだ。

学園生活というものを経験したことがなく、学園での思い出が欲しいと仰ったミレーヌ様に、毎日婚活に励む一学園男子として、プロポーズされるという一生残るであろう思い出を作って差し上げた。

もちろん身分上絶対に結ばれることはないからプロポーズは本気ではない。本当にただの思い出作りだ。

あれと同じことだと思えばいいのだろうか？

考え込む俺だが、ダン先輩はここぞとばかりに畳み掛けてくる。

「頼む。この通りだ」

そう言つて頭を下げるダン先輩を突っぱねることは俺にはできなかつた。

「——分かりました」

あーあ。またやってしまった。こんな風に頼み込まれると面倒臭くて断れないんだよ。

ルクシオンは俺のこういふところが中途半端だつて言うんだらうな。



修学旅行の行き先が発表される日。

廊下の壁に設けられた掲示板に貼り出されたグループ表の前には大勢の学生たちが集まっていた。

お目当ての場所に行けると喜ぶ者、違うことに肩を落とす者、あるいは親しい者と一緒の場所かどうか気にする者、反応は様々だ。

そして俺の行き先は——ウルクラムだった。

『どうやら献金進金は効いたようですね。その割には浮かない顔をしています』
姿を隠したルクシオンが言ってくる。

「見間違いだ。自分で決めたことだし、未練とかねーよ」

別にカンナに行つてレアアイテムを手に入れないと死ぬとか詰むとかいうほどでもない。ゲームの世界とはいえ、ステータスも経験値も見えない現実だ。レアアイテムの効果なんて本当にあるのかどうかとも分からない。

だから未練はない。ないと言つたららないのだ。

「あ、リオンさん」

振り返るとリビアがこちらに向かって軽く手を振っていた。

「リオンさんは行き先どこでしたか？」

「ああ、ウルクラムだよ。リビアは？」

「私はカンナです」

嬉しそうに言うリビアを見ると、気持ちが続ぶ——はずだったが、どこかドキドキというかモヤモヤというか、変な気分になってしまう。

先日ルクシオンが、クラリス先輩だけでなくリビアとアンジエも俺に好意を持っている、なんて言ったからだろう。

「へえ、よかつたじゃない。人気で倍率高かつたって聞いたよ？」

「はい！独特な街並みがあつて面白そうですし、浴衣にお祭りに花火もあつて、すごく綺麗だつて聞いて。昨夜は遅くまで当たるようにお祈りしちゃいました」

笑顔が眩しい。それに部屋で抽選に当たりますようにと祈るリビアの姿を想像したら——可愛過ぎて鼓動が高まつてしまう。

だが直後にリビアは一転して少し悲しそうな顔をする。

「ただ——アンジエも一緒なんですけど、周りの方たちがいっぱいいて——その——」

「ああ取り巻き連中か。そういえばアンジエも辟易していたな」

「はい。私もあんまりしつこく付き纏うのはやめるように言おうとしたんですけど——アンジエに目を付けられたら大変だから放っておくように言われて。——お祭り、アンジエと二人で行けたらいいなと思っていたんですけど」

「あいつら本当懲りないよな。今更媚びたつて信用が回復するわけないのにさ」

「ツ！リオンさん！声が大きいですよ」

つい漏れた言葉をリビアが小声で窺めてくる。

周りの学生たちの中にアンジェの取り巻きがいて、今の発言を聞かれていたら面倒なことになる——そう思ったのだろう。

別にそうなくても俺は困らないけどね。連中には俺と本気で喧嘩できる度胸も力もない。

もしかしたら若気の至りで暴力に訴えてくるかもしれないが、その時は社会的に制裁してやるまでだ。

だが、ここは素直に謝っておくか。

「ごめんごめん。まあ実際問題すぐにどうにかなるものでもないし、ほとぼりが冷めるのを待つしかないんじゃないかな。それにアンジェだってリビアと一緒に祭り行きたいって思っているだろうし、きつと隙を見て逃げ出してくるよ。今までだってそうだったし。大丈夫。せつかくの修学旅行なんだから、楽しむことを考えなよ」

「——そう、ですね。何だかそんな気がしてきました」

笑顔が戻ったリビアが「そうだ」と言って訊いてくる。

「リオンさん、お土産は何がいいですか？行き先が分かれたのならせつかくですし、交換したいです」

リビアの提案に俺は思わず口角が上がった。これは好都合だ。

あのお守りをお土産に頼めば一つか二つは手に入るかもしれない。

「そうだな——ご利益があるお守り、とかかな。リビアは？」

「私は特産の工芸品がいいです。あ、でもあまり高いものはやめてくださいね。受け取れませんか」

「分かった分かった。百ディアくらいで探しとくよ」

「百ディアでも充分高いですよ!?!」

驚き、ツツコミを入れてくるリビア。

本当にピユアで可愛い。

『やはり未練タラタラでしたね』

お守りが手に入る可能性とリビアの可愛さで、ルクシオンの指摘も今は聞き流せるくらい上機嫌になる俺だったが——

「どうして俺とマリエの行き先が違うんだ!?!」

不意に聞こえてきた声に浮かれ気分をぶち壊される。

声が出た方を見ると、攻略対象の五人がいた。

さっきの声はユリウス殿下が発したようだ。——あんた、負けたらマリエと別れるって条件で決闘して負けたんだから、本来マリエに近づける立場じゃないってこと忘れていないか？

「お前たちは別グループか。だったら俺がマリエをエスコートしないとな」
「マリエのことは僕たちに任せて、三人とも楽しんできなよ」

そう言つて勝ち誇つたような顔をするのはブラッドとグレッグ。

どうやらマリエと同じ目的地なのは五人の中でブラッドとグレッグだけらしい。

浮かれ気分のブラッドとグレッグ、肩を落とすユリウス殿下、微笑みを浮かべている
が目笑っていないジルク、少し寂しげに黙っているクリス——お前からあんな生意気で
面食いで守銭奴なちんちくりんのどこがそんなに良いんだよ。

呆れていると、ルクシオンが聞きたくなかつた情報を教えてくる。

『マスター。どうやらブラッド、グレッグ、マリエの行き先はウルクラムのようですよ。
よかつたですね』

(は?)

思わずグループ表で彼らの名前を探すと——

「げっ!」

思わず声が漏れた。

よりにもよつてあの三人と一緒に——心なしか頭痛がしてきた。

「リオンさん?」

リビアが怪訝な顔をする。

その顔は明らかに俺を心配している。

——なんかものがごく罪悪感を感じる。

マリエなんか夢中になっているあいづらにこんな可愛くて良い子をくつつけるとか、可哀想じゃない？

「ああごめん。何でもないよ」

内心でいざれ攻略対象の誰かとくつついてもらおうと急に突き放すような形で距離を取ったことを謝罪する。もつとちやんとリビア本人の気持ちを考えるべきだったと思った。

とは言っても——リビアの気持ちを考えて、それでこの先どうするのか、どうすればいいのかわからない。

とりあえずできることからやっていくほかないだろう。

差し当たり修学旅行が終わったら、リビアにお土産として聖なる首飾りを渡して、その後腕輪を回収する。

その後のことは——まだ考える時間はある。

——あるはずだ。